

おれたちと私たちはいかにして貧しさを失ったのか？

「世代問題」と文化と社会の分離

河野真太郎

1 「定義」の混乱？

本論で論じたいのは、文化的左翼と社会的左翼、さらにはより広く文化と社会の分離の問題と、世代の分離の問題は深い関係にあるということだ。文化と社会の分離と世代の分離は、どちらが鶏で卵かは分からないが、同時に起きる。これのもっとも現代的な例は、現在のフェミニズムに見てとることができただろう。

現在のフェミニズムを名付ける試みは様々になされているが、その文献を渉猟すると大変な困惑を感じずにはいられないだろう。問題は、「ポストフェミニズム」と「第三波フェミニズム」

の記述である。ある論者が「ポストフェミニズム」と呼ぶものが、他の論者にとっては「第三波フェミニズム」であるというような混乱が生じているのだ。

ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの関係の、ひとつの見方——そしてこれは私が取りたい見方でもあるのだが——は以下のようになるだろう。すなわち、一九六〇年代から七〇年代（場合によっては八〇年代）の第二波フェミニズムの後に訪れたのはポストフェミニズムとも呼べる状況であり、それに対応するために第三波フェミニズムが構想されつつある。このマッピングにおいては、ポストフェミニズムとはフェミニズムの一形態ではなく、まさに「フェミニズム以後」の「状況」

を表す名前だということになるだろう。

この意味でのポストフェミニズム状況をもっともうまく表現したとされるのが、『ブリジット・ジョーンズの日記』（原作一九九六年、映画版二〇〇一年）である¹⁾。清水は、『ブリジット・ジョーンズの日記』には、「フェミニズムのみならず、一九六〇年代の反乱……のなかで探究された「社会的公正」を求める「政治的自由」が、ポスト・フォーダイズム体制……に呼応しながら市場と貿易の「自由」、個人の「選択の自由」に置きかえられていった時代に対するひとつの応答」が見て取れるとする(270)。主人公ブリジットは喫煙、飲酒、仕事と恋愛の失敗といった苦境にありながら、それをフェミニズム的な問題意識でとらえることはせず、むしろ「日記」をつけて自己管理をし、自己を革新しようとする。ブリジットには酒や煙草をやめ、ダイエットをし、仕事に打ち込み、さらには男を見つける「自由」が与えられている。それができないのは、ブリジット自身の「選択」の問題であり、社会的にそれらの機会は彼女に与えられているのだ。

それが本当だとして、それではブリジットに「自由」を与えたのは誰だろうか。清水が述べるように、それは一九六〇年代の「反乱」とフェミニズム——つまり第二波フェミニズム——の成果である。つまり、第二波フェミニズムがもたらした「解

放」が新自由主義およびポストフォーダイズムと親和的なものになったという皮肉が、ポストフェミニズム状況なのである。

そのように表象された第二波フェミニズムとは、メリトクラティックな社会に参加する機会を最大化することをめざす運動である。それは二面性を持っている。つまり、もし第二波フェミニズムが、「公平な競争」に参画する機会を女性が獲得するための運動であったなら、それはそのような機会を与える限りにおいて解放的であるし、新自由主義的な資本主義社会自体を前提とみならず限りにおいて解放的ではない。これはそのまま、ブリジットの「自由」の二面性である。この二面性は、たとえば日本の男女雇用均等法の二面性でもある。男女雇用均等法は確かに女性の雇用を増加させた。しかしその大部分はパートタイム労働者であり、それは労働力の流動性を「資源」とするポストフォーダイズムにとって大変に都合がよかったのである(Casella 202-3)。

この状況に対応するのが第三波フェミニズムだとすると、それはポストフェミニズムの個人主義、消費者主義、そしてその文化政治を乗り越え、ナンシー・フレイザーが論じる「再分配」の問題を集団的に解決することをめざす運動となるべきだろう。またそれは、再分配の問題は第二波フェミニズムによって解決されたとは考えないだろう。むしろここまで述べたよう

に、第二波フェミニズムの「成果」は同時に新たな再分配の問題をひきおこしており、それはポストフォーディズムであろうが後期資本主義であろうが、全体的な社会的政治の問題に接続するし、接続されなければならないと考えるだろう。

ところが、そのように第三波フェミニズムをとらえる論者はむしろ少数派である。それどころか、今ポストフェミニズムを定義するのに使った「個人主義」や「文化政治」こそ第三波フェミニズムのアジェンダであるとされるのが、支配的なのである。たとえば、日本語で初めて「第三波フェミニズム」を冠する著作を書いた田中東子は、アニタ・ハリスによる定義を参照し、第三波フェミニズムには(1)文化政治への関心の移行(2)個人主義への移行(3)「女性」カテゴリーの複数化という三つの軸があるとする(15)。(1)について田中は、「フェミニズムの初期の波が提起した問題はすでに……解決されてきた」と断じ、第三波フェミニズムは「文化産業の急増と、そこで消費・生産活動を行っている女性たちの問題、つまり、文化的なものなかで／を通じたマイクロポリティカルな問題を扱う文化政治」に取り組むとしている(15)。

ここで起きているのは、いっぽうでは「文化」の意味の限定である。つまり、ここではいわゆる文化産業(おそらく「ポピュラー・カルチャー」に属する文化産業)の生産・消費にまつ

わるものが「文化政治」であるとされる。そこからは「それ以外の文化」が排除されているという問題もあるが、むしろ問題は「それ以外の消費・生産活動」が排除されていることかもしれない。そしてその基礎となっているのは、第二派までのフェミニズムによって再分配の問題は解決されたという社会認識である。文化産業以外の生産・消費はもはや第三波の対象とはならないという認識だ。

さて、このような定義の「混乱」をめぐる、ここでは「正しい定義」を確定することに重点は置かない。そうではなく指摘したいのは、こういった態度の差の基礎となっているのは、じつのところ第二波フェミニズムに対する認識の違いであるという点だ。これについて田中は再び典型的である。田中の著作は、ある「歴戦のフェミニスト」がある学生に「あなたたちは楽でいいわね」と言い放ったというエピソードから説き起こされている(三)。そのフェミニストのメッセージとは、自分たちの世代が勝ち取ったさまざまな権利と機会を、今の学生たちの世代はそれと知らずに享受しているということであり、またそれを言われた学生は、まさに「ブリジットの自由」の中での苦悩を理解できない「フェミニスト」に対する憤懣をあらわにするのである。つまり、第二波フェミニズムとの関係における第三波フェミニズムの「定義」においては、世代の問題がせり

出してくるのだ³⁾。

「簡便に述べてしまえば、第三波フェミニズムの相反する定義は、第二波フェミニズムを集団主義的なものとして見るか個人主義的なものとして見るかの違いに由来している。ケイティ・ロイフィの『二日酔い——セックス、恐怖、そして大学内のフェミニズム』を読んだ際の違和感からフェミニズムの世代問題を論じるアストリッド・ヘンリーはそれを次のように記述している。

ロイフィのテキストななかで私にもっとも理解し難かったのは、彼女が描いてみせたビューリタンの規則を押しつけてくるようなものとしてのフェミニズムのイメージであった。

ロイフィにとってフェミニズムは、女性に行儀作法を教える厳格な母であった。彼女はフェミニズムによって感情が束縛され、フェミニズムのきまりや規則の長いリストによって自分の個性と自由ががんにじめられられたと説明した。私にとっては、フェミニズムはつねにそのまったく反対を意味した。私が個人となり、女性の適切な地位についての社会の多くのルールから自由になる方法であった。(1-2)

この一節には第二波フェミニズムに対する新たな世代の女性

たちの感情がかなり典型的に示されてはいないだろうか。同世代であるロイフィとヘンリーの違いは、「第二波は集団主義的でいやだった」という感情と、「第二波は個人主義的でよかった」という感情の差異である。もちろんここからは、「第二波は集団主義的でよかった／個人主義的でいやだった」という感情が排除されており、それがここまで述べた第三波の定義の問題を惹起している。

ただしここでは、どの感情が正しいかを見定めようというのではない。また個人主義が現在のフェミニズムの大前提となっていることを批判し、集団主義を主張しようというのではない。問題なのは、まさにその「個人主義／集団主義」という対立そのものである。つまり、第二波フェミニズムが集団主義的だったととらえるにせよ個人主義的だったととらえるにせよ、またそれがよかったと考えるにせよいやだったと考えるにせよ、ポストフェミニズム／第三波フェミニズムが、第二波フェミニズムを集団主義的／個人主義的なものと抽象化した上でそのアイデンティティを獲得しようとしていることは、いったい何を物語っているのだろうか。

ごく常識的でつまらない言い方をすれば、第二波フェミニズムには個人主義的なところもあれば集団主義的なところもあっただろう。新自由主義の時代が深まるにつれて、その一部分は

残滓的なものとなり、ほかの一部分は切りはなされて新自由主義的な現在の支配的なものを構成するようになっただろう。本節で述べた「定義の混乱」はしたがって、そのように複雑にからまりあった現実を「集団主義／個人主義」といった形で抽象化することに由来している。実態はより弁証法的にとらえられるべきものであろう⁴⁴。しかし抽象的分離は、抽象的ではあるが力を持つ抽象であるのが常である。では、この分離はどのような力を持つのか。誰（何）にとって都合の良い分離なのだろうか。そこで重要なのは、個人主義と集団主義の抽象化と分離——そしてそれを内容とする世代の分離——こそが新自由主義にとって重要だったかもしれないということである。

たとえば、福祉国家と階級上昇物語の結びつきを指摘するブルース・ロビンズは、この結びつきは「常識に反する」ものであると述べる⁴⁵。つまり、個人主義的でメリトクラティックな階級上昇物語とは（新）自由主義とむすびつけられるのがふつうであって、福祉国家はより集団主義的なものとして表象されてきたのである。ロビンズはここまで踏み込んではいないが、そのように福祉国家を表象すること自体が新自由主義の感情的根拠になっているとは言えまいか。つまり、例えば労働組合のことを考えればよいが、左翼内部における労働組合の集団主義嫌悪——「新しい社会運動」に支配的な感情——もまた世

代の分離として表面化するのであり、組合運動を破壊したい新自由主義にとってそれは好都合なのである。同じように、第二波フェミニズムの集団主義を嫌悪する感情の中には、第二波福祉国家においてこそ可能なものだったのであり、新自由主義の現在にはそれは無効であるという感情もあるだろう。

第二波フェミニズムと第三波フェミニズムとの間に「世代問題」が存在するとして、その問題の内容とは以上のようなものであろう。すなわち、個人主義と集団主義、文化と社会、承認と再分配とのあいだの抽象的断絶こそが、世代の断絶の内容をなしており、それはまた新自由主義的な現在との親和性が非常に高い断絶なのだ。

以上が正しいとすれば、私たちが考えるべきなのは連続性である。じつのところ、ここまで述べた世代の分離によって失われてしまう重要な要素は、福祉国家と新自由主義のあいだの、否定的でも肯定的でもある連続性であろう。言うは易しで、筆者にもいかにしてそれが可能なかは見当もつかない。しかし少なくとも、ロビンズが個人主義的な階級上昇物語のうちに「共通善＝公益」へと向かう、つまり集団的な社会変容へと向かう願望と契機を見いだしているように、第二波フェミニズムとポストフェミニズム状況とのあいだの否定的に見える連続性の中に、可能性の種子を見いだす必要があるということだけは

言える。

ところで、このような世代の断絶、つまり個人主義と集団主義や文化と社会の断絶をその内容とするような世代の断絶は、歴史上初めて起こったものではない。私の念頭にあるのは一九五〇年代イギリスであり、その五〇年代の労働者階級もまた、一九二〇年から三〇年代という「一世代前」との分断の感覚——場合によってはその忘却——において世界を認識せざるを得なかったのである。

2 おれたちの怒りはどこへ向かうのか

アラン・シリトー。「怒れる若者たち」の中でも、「本当の」労働者階級出身の作家であり、その作品はそれゆえに労働者階級の真正なる怒りを表現したものと考えられる作家である。そのシリトーのデビュー作、一九五八年出版の『土曜の夜と日曜の朝』の主人公、アーサー・シートンは確かに怒っている。しかし、彼の怒りは誰に向けたものであるか。イギリス労働者階級伝統の「やつらとおれたち」の「やつら」は、アーサーにとって労働者階級を搾取する中産階級であるか。答えは否である。では何に向けられているのかと言えば、アーサーの怒りは彼の認識するところの福祉国家の全体的な状況に漠然と向けられて

いる、という言い方が正しいだろう。それはたとえば、アーサーの働く自転車製造工場の職長ロボーとの会話によく表われている。

ロボーはべらべらまくしたてた。「おれがここで働きはじめたころ金曜の晩にポケットに入れて帰ったのは七シリング六ペンスだぜ。それがいまのきみはどうだ。十四ポンド。ひと財産じゃないか」

……

「『所得税、二ポンド十八シリング六ペンス』ひでえもんだ。おれの稼いだ金なんだぜ。やつら、いまにみてやがれ」

「それは会社のせいじゃないよ、べつに」とロボーはタバコに火をつけて、やっと仕事から解放された感じだった。

「あんまりがつつくもんじゃない」

「がつつくもんか。おれが自分で稼いだんだ。一ペニーにいたるまでね。それに文句はないだろう？」(80-81)⁽⁵⁾

このやりとりにはまず、^{アフルリユレントンツサセタイ}豊かな社会に向かって相対的に富裕化する労働者階級の姿が書き込まれていることを確認しつつ注目したいのは、アーサーの怒りは労働者階級を搾取して利潤を得る中産階級に向けられているのではなく、税金を取る国家

に向けられているということである。客観的には、税金はケインズ主義的な福祉国家の資源であり、アーサーの週給十四ポンドはその福祉資本主義の成功に負うところが大きいのだが、アーサーはそれを認めない。

いや、これは労働者階級伝統の、エスタブリッシュメントに対する怒りの変奏である、という意見もあるかもしれない。しかし、アーサーの怒りはそのような一貫性をもつものではない。

おれから所得税を取りたてる鼻すすりの薄のろ、家賃をまきあげるやぶ眺みの豚野郎、それに、しょっちゅううるさいことをいうあの頭でっかちもだ。組合集会に出るとか、ケニヤで起こっていることへの抗議文に署名しろとか。なんの関係があるってんだ！ (214)

アーサーの怒りの矛先は税金を取りたてる国家や家賃を取る家主だけではなく、組合集会やマウマウ団の弾圧への抗議運動への参加を呼びかける社会主義者にも向けられる。ここにはすでに政治的な保守派と急進派という区別は存在せず、アーサーをとりまく福祉国家の状況を生み出すもの（労働党もその一部）への憤懣が、アーサーを「理由なき反抗」へと駆り立てる。同僚ジャックの妻ブレンダとの不倫も、福祉国家を成立させる

最小単位たる（核）家族への抵抗と見ることもできよう。

そのジャックとアーサーとの対照は以上の読みを確証させる。物語の後半では職長に昇進するジャックとアーサーとの最後の会話は二人の対照を明確に浮き彫りにする。

「そんなふうを考えるもんじゃないよ」とジャックは怒りもせず思いやりのある声で、親身な忠告をした。「おまえは折れようとしななんだからな、アーサー。折れるつもりになりゃ、人生は楽しいのに」

「おれは楽しんでるんだぜ」と彼は大きな声でいった。「おまえと違うからって、楽しんでないわけじゃない。おまえにはおまえの、おれにはおれの人生があるんだ。おまえは職長の仕事と賭けごとにうちこむし、おれはへホワイト・ホース」と釣りと女漁りにうちこむんだ」(207)

アーサーとジャックはそれぞれに「楽しんでる」というアーサーは正しい。アーサー自身はともかく、ジャックは福祉資本主義の体制を肯定しつつ、その枠内で満足のいく人生を送っているのだから。そう見たとき、小説の結末は皮肉に満ちている。アーサーは最終的に彼が関係をもつ女性のうちでもっともアーサーとは対極的な、富裕化する労働者階級の半中産階級的

な生活を期待するドーリーンとの結婚を決意する。アーサーが最後の場面で釣り上げる魚はアーサー自身である。小説の結末において、彼の福祉国家に対する抵抗は失敗に向かうのだ。

このような外形的な部分を見ると、この小説はその「怒り」にもかかわらず福祉国家の現状を肯定する文学、レイモンド・ウィリアムズが五〇年代文学の「新たな形式」と呼ぶ、「逃避」を主題とし、「労働者階級の生活の連続性の感覚」を失った文学そのものということになりそうである (*Politics and Letters* 272)。われには最悪の場合、ジェド・エステイが初期カルチュラル・スタディーズとともに「怒れる若者たち」の特徴とした、「イギリス的なもの」としての労働者階級の生活を報告する自己民族誌的な作品ということにもなるだろう。その場合、労働者階級の生活はそれ自身が社会的で政治的でもあるような全体的「文化」であることを止め、ひとつの「ライフスタイル」としての文化に縮減されてしまう。

確かに、アーサーの視点から語られた五〇年代労働者階級の生活は、歴史性なき「環境」の様相を呈しているともいえる。そのときに忘却されるのは、アーサーのおかれた「環境」が、ウィリアムズの述べるような労働者階級の生活の変化をとまなかった連続性の成果として獲得されたという事実である。端的にはそれは、世代の断絶の感覚として表れるだろう。アーサーの

過去の回想は第二次世界大戦をこえて歴史をさかのぼることは皆無であるし、アーサーの父親はテレビに魂を奪われた、豊かで墮落した労働者としてしか表象されない。なによりも、『土曜の夜と日曜の朝』をイギリス小説における「人間の成長の物語」の系譜においてみたとき、この作品の特徴は明らかだろう。つまり、階級上昇と人間の成長が表裏一体であった一九世紀の教養小説と比較した場合に、また少なくとも労働者階級からの階級上昇と成長が切り離せないハーディからロレンスにいたる小説と比較した場合に、この作品を際立たせているのは「主人公の階級的環境に変化がない」ことであり、もし主人公に「成長」があるとして、それは心の中でそのような環境と折り合いをつけるということだけなのだ。確かに変化していたはずの労働者階級の生活は、小説のプロットを解決するために変化することは求められない。したがって、それが過去に誰かの手によって変化させられた可能性についても、考える必要はない。

この小説はそのようなメッセージを発している。そうだとすれば、ここにある感情とポストフェミニズム的な感情の共通性は以下のようにまとめることができるだろう——おれたち／私たちは貧しさから抜け出した。せっかく抜け出したのに、なぜ一世代前の「被害者」の顔をおしつけるのか。それなりに楽しい現在を謳歌して何が悪いのだ。確かにアーサー

はそのような感情に対して漠然と怒るのだが、その怒りが真の意味で社会化されることはない。

3 ポピュラー・ポリティクスという危機

しかしこの小説の「福祉国家批判」は、もう少し真剣に受け取ってもいいかもしれない。ここまでの議論を要約すれば、『土曜の夜と日曜の朝』における、労働者階級の生活の「変化の連続性」の拒絶は、文化（個人の成長）と社会（階級生活の変化）とのあいだの分離と表裏一体なのであるが、文化と社会の分離は同時代の労働党のポリティクスの危機でもあったからだ。その意味でアーサーの労働党に対する不信には真正な部分もある。

一九五一年に保守党に政権の座を明け渡すまでの労働党の政策は、テクノクラティックでメリトクラティックな福祉資本主義であった。たとえば、一九四九年の労働党のマニフェスト『労働党はイギリスに信を置く』で示される四原則は以下の通りである。

第一に、機会の不平等と富のはなはだしい不平等は、道徳的に不正であり、経済的に有害であると私たちは信ずる。そ

れゆえ、私たちはすべての人びとのための平等な機会を確立し、貧富の極端な差を廃絶することに着手したのである。

第二に、^{ビーズ}国民の経済的な運命は特権的な少数の所有者たちによって決められるべきではないと信ずる。それゆえ、私たちは経済的な権力を^{ネーション}国民の手にゆだねる事業に着手した。

第三に、資本主義は、非効率と失業によって、機械が私たちに与えてくれた生産能力を無駄にしていると信ずる。それゆえに、私たちは^{ネーション}国民の生産力を拡大し、大量の失業をなくし、^{ビーズ}国民の生活水準を上昇させることに着手した。

第四に、繁栄し分別のある民主主義を創造することによって、それも会議室と国会におけるのと同じように産業においても豪壮なそれを創造することによってのみ、私たちは人間の尊厳と個人の自由を高めることができると信ずる。

私たちはみな、これらの原則にもとづいて日常生活を送らねばならない。仕事場ではより多くのよりよい製品を生産することによって、そして余暇にはコミュニティの生活をより広く、より豊かにすることによって。(The Labour Party 3-4)

例えば第一原則は、レトリック上は美しく大いに結構と思われるかもしれない。平等な機会をすべての人に、というメリトクラシー的な理想。まさにその「メリトクラシー」という言葉は、当時の労働党の若き知識人マイケル・ヤングの『メリトクラシーの勃興』による造語だったわけだが、そのような理想は解放的であると同時に、まさに第二波フェミニズムが抱えたような二面性、つまり個人主義的で競争的な社会の根本的な部分での肯定という裏面も抱えていたのである。ここに、ヤングとともに当時の労働党を知的に導いたアンソニー・クロスランドの『社会主義の未来』での言葉を付け加えればその意味は明らかだろう。クロスランドは「私たちは諸個人が幸福になり、裕福になり、かつては上流階級のみに限られた贅沢を享受している姿を目にしたいということ、そしてその過程において、階級なき社会に向けた大きな一歩を踏み出すであろうこと」を高らかに宣言するのである (Crossland 2003)。『労働党はイギリスに信を置く』の第二原則以降、そして引用した付言の部分は、『土曜の夜と日曜の朝』においてジャックが「楽しもう」としていた豊かな労働者階級のヴィジョンである。

このような労働党の「ポピュラー・ポリティクス」が力を持つことによって失われたのは、「文化」である。この場合の文

化とは、労働者階級コミュニティの文化のことであるが、ここで取り急ぎ付け加えなければならないのは、ここで言う「文化」とは社会と区別不可能な意味での文化だということだ。しかしこの時代に、社会主義者自身のあいだに「文化」と「社会」の分断が生じた、もしくは現在から見ればそれが生じたように見える。一九六四年にベリー・アンダーソンが次のように書いたのは、そのような分断を念頭においてのことである。

今日のイギリス社会の「専門的・技術工学的な」批評 (クロスランド、シオンフィールド) も、「倫理的な」批評 (ウィリアムズ) も、歴史的な基礎をもたないということは確かに重要である。(6)

気をつけなければならないのは、アンダーソンはこのように言うことによって「文化」派と「社会」派の分断を記述しているのか、それともパフォーマティヴに創造しているのか不分明であるという点だ。なんにせよ、アトリー政権も含むイギリス労働党を支えたクロスランドやシオンフィールドといった知識人は「専門的・技術工学的な」批評と特徴付けられており、いっぽうでおそらくフェビアン協会に代表されるような、コミュニティの感情や倫理に重点を置く社会主義者の一派は「倫理的

な」批評と名付けられている。(それをウィリアムズに代表させていることの問題については、本論では論じない。)

マーティン・フランシスはアトリー政権のポリティクスを分析して、功利主義的でテクノクラティックだったと思われがちなクロスランドらがじつのところ十分倫理的な社会主義者であったことを論じているが、問題はそのように「反論しても問題の分断そのものは保存されてしまうことである。問題は、功利主義的な社会政策と倫理的な社会認識・実践とのあいだに分断が生じたことそのものであり、またそれによって労働者階級の生活が先に述べたように限定された意味での「文化」になってしまったことである。

『土曜の夜と日曜の朝』には、そのようにして限定をこうむる前の労働者階級コミュニティの全体的「文化」が、一瞬間を覗かせる場面がある。残念ながらそれは、この後述べるようにはかなく消え去るのだが。しかしその過程が、労働党のポピュラー・ポリティクスが何をもたらしたかについて語ってあまりあるので、紹介しておきたい。

第六章では酔っ払ってパブで喧嘩をしたアーサーと友人のフレッドが、酒場からビールのジョッキを手にふらふらと出てきて葬儀屋のショーウインドウをのぞき込む男を目撃する。するとその男はジョッキをショーウインドウにたたきつけ、窓を割

ってしまう。すると軍服を着た女性が彼を取り押さえて警察に突き出そうとする。男は死んだばかりの母親のために、飾ってあった花瓶が欲しかったのだと許しを請う。野次馬のあいだには同情の声があがり、アーサーも軍服の女に本能的な敵意を感じ、男に逃げるようけしかける。ここまでは労働者階級コミュニティの感情のあり方が胸を打つ場面であろう。問題はその後、その場を去ったアーサーは酔っぱらい運転の自動車にあやうく轢かれそうになる。腹を立てたアーサーとフレッドはその自動車をひっくり返すという狼藉に出る。

ここでアーサーは、憐れな貧しい男を救えなかった義憤を、中産階級の象徴たる自動車にぶつけているのだろうか。じつのところそうではない。この小説においては自動車は、まずは職長ロボーと結びつけられているのだ。

ロボーは乗用車をもっている——ただし中古のモリスだ——し、高級住宅地の半独立家屋に住んでいる。そんな気がどりがアーサーには気にくわない。ふたりとも根本的にはおなじ種類の人間なのだし、したがってロボーがもし自分と同じような四部屋の家に住んでいたらもっと親しみがもてるだろう。(39)

4 変化の連続性へ

ロボーとは言ってみれば物語の後半で職長となるジャックの将来の姿である。この小説において乗用車は、アーサーと「根本的におなじ種類の人間」であるはずの人間と結びつけられる。しかし乗用車の持ち主たちは、労働党と同じく労働者階級を「裏切った」者たちだ。葬儀屋のウインドウを割る男に対するアーサーの階級的連帯心は、その直後に富裕化する労働者階級内部での微細な、しかし重要な差異に対する怒りへとずらされていく。本当に怒りに向けてべきなのは、そのような労働者階級内部の分断を生み出すものであるはずなのだが。アーサーの怒りは、分断そのものには向かうものその原因に向かうことではない。それ自身が、彼が労働者階級の生活の「変化の連続性」を見失っていることの証左となっている。しかし、フェミニズムに関して述べたのとおなじことをここでも述べる必要がある。つまり、アーサーの願望（または怒り）はいかに否定的なものに見えようとも、いかに五〇年代ポピュラー・ポリテクスにとらえられているように見えようとも、少なくとも「そのような社会ではない社会」を求める願望である、ということだ。

本論ではかなり不穏当な比較を行ったことに筆者は意識的である。つまり、ポストフェミニズム／第三波フェミニズムの直面するジレンマと五〇年代の労働者階級のそれを、「文化と社会の分断」という糸によって結びつけようというのだから。

だが、そのような比較を行う目的は、そこに共通の解決策があるかもしれないということである。比較することによって初めて浮き彫りになるような解決策が。

あらゆる「解決策」がそうであるように、ここで提示するそれも非常に限定的なものにならざるを得ないであろう。それは、個人の変化（成長）と世代をこえた社会の変化（成長）を結びつけて、それらを同時に見るような文学を評価する方法を私たちが学ぶことである。ここでそのような評価の対象になりうる二つの作品を挙げておこう。すなわち、レイモンド・ウィリアムズの『辺境』と、キャロリン・ステイードマンの『ある善良な女性のための風景』である。詳しくは別論を待つしかないが、この二つの作品は自分の世代と親の世代とのあいだを往還し、労働者階級（の男性と女性）の生活の中にある「変化の連続性」を見すえようとする作品である。それぞれフィクションとノンフィクションであるものの、筆者／主人公が労働者階級か

ら大学で教えるアカデミシャンへと「階級上昇」したことを共通のモチーフとするこれらの作品は、しかし単に個人が社会の「はしご」を昇る物語ではない。これらは、先に触れたブルー・ス・ロビンズが述べるような意味での「共通善＝公益」を個人の物語のなかに見ようとする作品であり、それを見るための重要な視点が「世代をこえた変化の連続性」となっている。これ

らの作品の「評価」とは、こういったモチーフの歴史的必然性の評価となるだろう。その意味ではポストフェミニズム／第三波フェミニズムの「物語」も必然的であるし、シリトリーの「物語」も必然的なものである。それが、今を生きる私たちの生の必然性といかに交錯するのか。文学を「評価」することはそのような問いに答えることであるのかもしれない。

註

- (1) ポストフェミニズム状況の代表作としての『ブリジット・ジョーンズの日記』読解についてはMcKobbe(第一章)も参照。この後述べるような意味でのポストフェミニズム批判としても先鋭なものとしてはHenryを参照。また、ポストフェミニズム状況をもうとも早く、一九八二年に描いてみせたのはキャリル・チャーチルの『トップ・ガールズ』である。これについてはエグリンントンを参照。

- (2) ただし、竹村和子編『ポストフェミニズムム』における「ポストフェミニズム」は、実質的にはこの後述べるような意味での第三波フェミニズムの問題圏を大きく共有するものである。竹村らが第三波フェミニズムという呼称を使用しなかった理由については序文を参照。
- (3) 第三波フェミニズムと世代の問題についてはHenryを参照。また第三波フェミニズムにおける「個人主義」の重要性を説くBudgeonの第7章もまた世代の問題に取り組んでいる。

- (4) ポストフェミニズム状況と第三波フェミニズムとの弁証法的関係については三浦を参照。ポストフェミニズムとは、後期資本主義＝ポストフォードイズムにおいて流動的な女性の労働力が「支配的」になった時代であり、それゆえにポストフェミニズム状況における労働を考へることは後期資本主義そのものを考へることである。
- (5) 『土曜の夜と日曜の朝』からの引用は、永川訳を参照し、必要な場合は適宜修正を加えた。
- (6) この点についての考察は河野も参照。

- Anderson, Perry. "Origins of the Present Crisis." 1964. *English Questions*. London: Verso, 1992. 15-47.
- Budgeon, Shelley. *Third Wave Feminism and the Politics of Gender in Late Modernity*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2011.
- Castells, Manuel. *The Rise of the Network Society*. 2nd ed. Chichester: Wiley-Blackwell, 2010.
- Crosland, Anthony. *The Future of Socialism*. 1956. London: Constable, 2006.
- Esry, Jed. *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England*. Princeton: Princeton UP, 2004.
- Francis, Martin. "Economics and Ethics: The Nature of Labour's Socialism, 1945-1951." *Twentieth Century British History*, Vol. 6, No. 2, 1995: 220-43.
- Fraser, Nancy. *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "Postsocialist" Condition*. New York: Routledge, 1997. 『中斷された正義——「ポスト」社会主義的「条件をめぐって」批判的省察』——仲正昌樹訳、御茶の水書房、二〇〇三年。』
- Harris, Anita ed. *Next Wave Cultures: Feminism, Subcultures, Activism*. New York: Routledge, 2008.
- Hennesy, Rosemary. *Profit and Pleasure: Sexual Identities in Late Capitalism*. New York: Routledge, 2000.
- Jedje, 2000.
- Henry, Astrid. *Not My Mother's Sister: Generational Conflict and Third-Wave Feminism*. Bloomington: Indiana UP, 2004.
- Labour Party. *The Labour Believes in Britain*. London: The Labour Party, 1949.
- McRobbie, Angela. *The Aftermath of Feminism: Gender, Culture and Social Change*. Los Angeles: Sage, 2009.
- Robbins, Bruce. *Upward Mobility and the Common Good: Toward a Literary History of the Welfare State*. Princeton: Princeton UP, 2007.
- Roiphe, Katie. *The Morning After: Sex, Fear, and Feminism on Campus*. Boston: Little, Brown and Co., 1993.
- Sillitoe, Alan. *Saturday Night and Sunday Morning*. New York: Vintage, 1958. 『土曜の夜、日曜の朝』永川玲一訳、新潮社、一九七九年。』
- Steedman, Carolyn. *Landscape for a Good Woman*. 1986. London: Virago, 2005.
- Williams, Raymond. *Border Country*. London: Chatto and Windus, 1960. 『境界』小野寺健訳、講談社、一九七一年。』
- . *Politics and Letters: Interviews with New Left Review*. London: NLB, 1979.
- Young, Michael. *The Rise of Meritocracy*. 1958. New Brunswick: Transaction, 1994.
- エブリントンみか「トップ・ガールズ」のフェミニズム——キャリル・チャールズの仕事をめぐって。川端康雄・大貫隆史・河野真太郎・佐藤元状・秦邦生編『愛と戦いのイギリス文化史——一九五一年——二〇一〇年』慶應義塾大学出版会、二〇一一年、一八七—二〇一。
- 河野真太郎「序章2 文化とは何か——20世紀後半イギリスの文化と社会」川端康雄・大貫隆史・河野真太郎・佐藤元状・秦邦生編『愛と戦いのイギリス文化史——一九五一年——二〇一〇年』慶應義塾大学出版会、二〇一一年、一九—三四。
- 三浦玲「『ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの可能性——『ブリキユア』『タイトニックス』『AKB48』三浦玲一・早坂静編『ジェンダーから世界を読むⅢ』彩流社、二〇一三年（刊行予定）。
- 清水知子「ブリジット・シヨーンズの「自由」——サッチャリズムとポスト・フォードイズムの行方」川端康雄・大貫隆史・河野真太郎・佐藤元状・秦邦生編『愛と戦いのイギリス文化史——一九五一年——二〇一〇年』慶應義塾大学出版会、二〇一一年、二六九—一八三。
- 竹村和子編『ポスト・フェミニズム』作品社、二〇〇三年。
- 田中東子『メディア文化とジェンダーの政治学——第三波フェミニズムの視点から』世界思想社、二〇一二年。